

「ふははははは！ ひ弱な人間どもよ、逃げ惑い、泣き叫べ！」

日曜の昼下がり、公園に似つかわしくない声が響いた。

そこに現れたのは黒いコスチュームに白い仮面をつけた怪人。胴体と手は離れており、自由自在に浮かぶ手から光線を周囲に放っていく。

「うわああ！ 助けてくれ！」

爆発する遊具。家族連れで平和だった場所があっという間に悲鳴に覆い尽くされる。だが、一目散に逃げる人々の中から、ある少女が反対に彼の前へと走ってきた。

「出たわね、怪人！ 悪いことはやめて、おとなしくしなさい！」

少女の名前はマジカル・アイ。ピンクのフリフリのついた衣装に身を包んだ魔法少女だ。とはいえ、コスチュームからのぞく滑らかな手足や少し大きな胸は小さな子供が夢見るそれよりかは大人びた姿をしている。

そこで、二足歩行の猫に似た生き物が彼女の肩に乗ってきた。

「公園にいた人達の避難、終わったにゃ！ 誰も入ってこれないように結界を敷いたから、もう大丈夫！」

「ありがとう、マジカルキャット！」

えっへんと胸を張るマジカルキャット。その生き物こそ、少女にマジカル・アイになる力をあたえた妖精だ。

「すぐにやっつけるよ！ くらえ、マジカルブラスト！」

そう言ってステッキを取り出すと、怪人目掛けてビームを放った。しかし、相手は軽い身のこなしで避けると、まるでステップを踏むようにして逃げていく。

「どうした、マジカル・アイ！ 全然当たらないではないか！」

「ちょろまかと！」

次々とビームを放つが、まるで当たる気配がない。代わりに彼女も遊具に着弾させて、周囲を吹っ飛ばしてしまっている。

「何かおかしいにゃ！ あいつ、最初からどこに撃つかわかってるみたいにな！」

「まさか、私の思考が読めるの！？」

マジカル・アイが攻撃をやめると、怪人も動きを止めた。「くくく」と笑いを噛み殺しながら、近づいてくると大げさに手を振って会釈する。

「その通り！ 私の能力の一つは思考盗撮！ お前が考えていることはお見通しだ」
「そんな……！ あなた、何者なの！？」
「超能力を極めた者、ザ・サイキッカーというのが私の通り名だ。なあ、遠藤愛」
「っ！」

本名を言われて、彼女は反射的にビームを放った。しかし、それも軽やかにかわされる。

「体の発育がいいことに悩んでいる中学生。魔法少女と名乗ることに、そろそろ抵抗を感じているようだな」

「い、言わないで！ あなたなんかに私の気持ちがあわかってたまるか！}

「ふ。我慢強さも個性のようだが、私が君を解放してあげようではないか！ 心の底に眠る欲望をな！」

そう言って、彼はマジカル・アイに向けてピンと指を弾いた。その瞬間、「ぐふっ！」とうめき声をあげてマジカルキャットが彼女の肩から吹き飛ばされる。

「キャット！」

「おっと、隙を見せるのはよくないぞお」

彼が手を交差し、印のようなものを描くとマジカル・アイの体が固まった。そのまま、宙に浮いたかと思うと体をエビのように反らされる。

両手は後ろに回され、足も背中の方に折り曲げられた。

「な、何をするの！？ 動けない！」

彼女の手からステッキが落ちて、からんと音を立てる。

「くくく。こうしてみると胸が強調されて、なかなかいいではないか。魔法少女などやめて、水泳選手にでもなったらどうかね？」

「何バカなことを……、ひうん！」

そこで怪人が彼女に手のひらに向けて閉じた瞬間、胸がたゆんと弾んだ。遠隔で彼女の胸を揉んだのだ。